

第10回 INNOVATIVE ユーザ会参加報告

吉田 伸一（整理課）
 本田 博（学術情報課）

IUG とは？

早稲田大学図書館は、図書館システム WINE として、1998 年 11 月より米国 Innovative Interfaces Inc.（以下、Innovative 社）の製品である統合図書館ソフトウェア INNOPAC を採用している。INNOPAC を導入する図書館は、米国を越えて全世界に及び、それらは 1991 年からユーザ同士の自主的な国際団体 Innovative Users Group（IUG）を組織している。

IUG の主な目的としては、メンバーの利益のために、Innovative 社による製品の開発や改良を促進する場としての役割を果たすメンバー間およびメンバーと Innovative 社の間の関係を強化し、コミュニケーションを深めるユーザの間で Innovative 社の製品利用に関する情報を集め、広く周知する、の 3 点が挙げられる。

年次大会

IUG は、1993 年より毎年 1 回年次大会（Annual Meeting）を開催しており、当館でも 1999 年から続けて参加者を派遣している。年次大会は原則として、奇数年に Innovative 本社に近い西海岸のサンフランシスコ周辺で開催し、偶数年には中西部と東海岸地域から交互に選定することになっている。1999 年以降は、オークランド、フィラデルフィア、サンタクララ各市で開催された。年次大会 10 年目にあたる今回の会場は、テキサス州ヒューストン市のウェスティン・ホテルであり、当館からは表記の 2 名が参加することとなった。

今回は 2002 年 4 月 27 日（土）～ 30 日（火）にかけて、世界 16 ヶ国から 1,200 名以上が参加して行われた。27 日には、まず新規ユーザのためのプレ・カンファレンスがあり、翌日のメイン・カンファレンスから実質的な会議が始まった。

開会式

28 日の午前中は、メイン・カンファレンスの最

初のプログラムとして、開会のイベントが行われた。新旧 IUG 議長の挨拶に続き、Innovative 社会長兼 CEO の Jerry Kline 氏が同社の現況について概括し、Millennium Access Plus（MAP）ワイアレス対応、電子ジャーナル管理等、この 1 年間の進展が報告された。また、初めて“Be Innovative!”賞の発表があったが、これはユーザ館の中から特に革新的（innovative）で卓越したシステム活用の事例を選んで同社が表彰するもので、“指導・研修プログラム”、“業務用モジュール”、“独自データベース”、“Web OPAC”の 4 部門から成る。ちなみに、最初の“Most Innovative Web OPAC”を受賞したのは、City of Fort Collins Public Library（<http://dalva.fcgov.com/>）と、Frick Art Reference Library（<http://fresco.frick.org/>）である。

セッション

メイン・カンファレンスは、各種テーマ別に 100 近くのセッションから成り、ユーザ館の館員や Innovative 社のスタッフが専門分野ごとに分担して、座長や講師を務める。テーマは、総括的なものから個別的なもの、既存機能の運用方法から新規サービスの紹介まで、非常にバラエティに富んでおり、各 1 時間ずつで、午前 2 コマ、午後 3 コマの時間帯の中に割り振られている。

参加者は、どれでも自由に選択して出席して良いが、2 人では最大 26 コマしか参加できないから、図書館としての必要性和各自の関心に応じて、事前に優先順位を付し、参加セッションを絞り込んでおいた。以下は、私たちが参加した 26 セッションのうちの一部である。

- Advanced Keyword Index and Searching
- Beginning with Millennium Circulation
- E-Checkin
- E-Journal Solutions
- MetaSource
- Millennium Access Plus

- Millennium Acquisitions/Serials Overview
- Millennium Cataloging - New Developments
- Release 2002 Enhancements
- WebOPAC - General Update

全体として新機能のセッションに比較的重点を置きながら、とりわけ Millennium という Web ベースの業務用モードについては、当館でも関心のあるところであり、情報を幅広く収集するように心がけた。

参加者はみな第一線の実務担当者であり、ほとんどのセッションで非常に活発な意見交換・質疑が交わされた。多様な事例に数多く接することもでき、特に私たち外国からの参加者にとっては、実際の有意義な会議であった。

サービス・設備等

IUG では、大会を盛り上げ、サポートするために、以下のようなさまざまなサービスや設備を提供している：

自分がどうしても議論したいテーマがプログラムに見当たらない場合は、“Birds-of-a-Feather” セッションという制度がある。所定のシートにテーマ、日時、会場等を記入して掲示板に貼り出しておけば、同好の士が集まってくる仕組みであった。

E-mail / インターネット・ルームでは、Innovative 社が提供した PC を自由に使うことができる。いつも大変混み合っているが、日本との事務連絡に非常に重宝した。また、同じ部屋には業者のデモ・ブースが設けられていて、3M や Swets Blackwell など 15 のベンダーが出展し、製品紹介や商談に利用していた。

アメリカらしく就職斡旋コーナーもあり、求人リストから探して申し込めば、参加者同士が面接するような場も用意されていた（秘密は厳守とのこと）。

イベントも充実している。まず 28 日夜の全カンファレンス・レセプションでは、ホテルの大会場にデザートやドリンクを並べ、全参加者が入り乱れて歓談する機会があった。私たちにとっては、他の図書館員や、Kline 会長始め Innovative 社のスタッフと親しく懇談する最初の良い機会となった。

同様の食事は他にも、29 日昼の全カンファレンス・ランチ、同夕の海外ユーザ・レセプション

と続き、ここでは特に香港からの参加者と、Millennium 運用における漢字対応の問題等について、有益な情報交換を行うことができた。

さらに、同夜には参加者が揃いの T シャツを着込んで、10 周年記念祭が盛大に催された。IUG への永年功労者が表彰され、彼らがモデルとなってこれまでの大会の T シャツを着てのファッションショーとなった。功労者には、図書館員に加えて Innovative 社のスタッフも数人選ばれ、同社とユーザ館の結びつきの強さを改めて実感した。

感想

個別モジュールを利用するユーザーの立場から、現在運用されているセッションと、書誌以外のデータベースの INNOPAC に追加される機能のセッションに参加した。

III 社が現在積極的に推し進めているキャラクターベースの業務システムから Web ベース（Millennium 版）への転換については、書誌作成では MARC21 を基本とする書誌のフォーマットがそのままである以上、Web の利点は業務をやりやすくするものではあるが、キャラクターベースも捨てがたいものがある。システム全体の進化を考えると、日本語処理の問題を解決できれば Millennium 版への移行はユーザーの立場から積極的に推し進めていく価値は、十分あることがあらためて認識された。（吉田）

近年の図書館システムを巡る環境の進展と競争は著しく、Innovative 社も次々と新機軸を打ち出し、他社との差別化を図っている。Millennium を基盤とした MAP には、WebBridge や MetaFind 等の製品を載せ、一言で言えばポータル機能の強化を進めている。これは、OPAC の役割が相対的に低下し、自館内外のあらゆる学術情報の窓口を志向するものである。

そうした技術的発展の上に、これからの図書館には、電子ジャーナルの導入、コンソーシアムの推進、予算の配分、固有資料の電子化、メタデータの組織化等々について、ますます総合的な判断を行い、効果的に利用者へ還元することが求められている。今回は、海外の図書館の前向きな取り組みを目の当たりにし、図書館サービスのあり方について考える大変良い機会となった。（本田）